

[7]

氏 名 (本籍)	菊池 誠一 (群馬県)		
学 位	博士 (学術)		
学 位 記 番 号	博乙第 37 号		
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 8 日		
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当		
論 文 題 目	ベトナム・ホイアン地域の考古学的研究 —広南阮氏時代(16～18世紀)を中心に—		
論文審査委員	(主査)	教 授	大沢 眞澄
		教 授	本多 俊和
		教 授	山本 暉久
		特任教授	櫻井 清彦
	上智大学	名誉教授	量 博満

論 文 要 旨

本研究の目的と方法

ベトナム社会主義共和国の中部クアンナム省にあるホイアンは、中部の最大都市ダナンの南約 30km に位置し、トゥーボン川の河口に形成された港町である。旧市街地には 19 世紀初頭前後からの木造町家群が並び、東南アジアのなかでも古い港町の景観とベトナムの古都市の「市」の部分をよく保存している点で 1985 年にベトナムの重要文化財地区に指定され、1999 年にはユネスコの世界遺産に登録された。このホイアンには、17 世紀に日本人の住む「日本町」があった。

本研究の目的は、筆者がこれまでベトナムでおこなってきた調査の資料・成果をもちいて、ホイアン地域の歴史的形成とその特質を明らかにし、南シナ海交易世界における歴史的位置を解明することにある。

本論文は 2 部の構成をとり、第 1 部では当該地域の遺跡分布のあり方から地域の歴史的変遷をあとづけ、そして 16～18 世紀にかけて中部地域に覇権を築いた広南阮氏政権下の国際貿易港のホイアンとその周辺の考古学的検討をおこない、貿易港の成立時期や 17 世紀に存在したとされる日本町の位置、その生活様式、地域の空間構造を考古学資料から考察した。また、ユネスコから世界遺産として認定された現在の町並みの形成と展開を文献史料や碑文史料の成果をくわえて解明をすすめた。

第 2 部では、ホイアンで出土した大量の陶磁器を検討し、その生産地と流通圏の問題、中部地域における食器様相、あるいはわが国との陶磁器交流などの解明をすすめ、文献史料のすくない中部地域の歴史的解明をおこなった。

研究方法は、ホイアンの町並み形成を解明するための旧市街地の発掘調査および地域研究の視点からトゥーボン川流域の遺跡分布調査と発掘調査を実施し、遺跡のあり方から地域史の再構成

をめざすものである。ベトナム側の考古資料の活用にあたっては、筆者が再調査をした資料をもちいた。

本研究は、筆者らがすすめた考古学調査の成果を十分に活用して、地域史研究の視点とベトナム歴史考古学研究の視点を合体させ、これまでほとんど語られることがなかったホイアン地域の形成と展開、その特質を解明するものである。こうした視点からのホイアン地域の考古学的研究は、国内外ではじめての試みである。本研究の意義があるとすれば、この点であろう。

本研究の成果

第1部 ホイアン地域の形成と展開

ホイアン地域は、紀元前後頃から中国南部や北部ベトナム地域との交流がみとめられ、すでに交易拠点としての性格をもち、チャンパ王国時代になると東西交易のなかに組みこまれていたことを明らかにした。15～16世紀前半にかけては遺跡数が極端に減少し、この背景にチャンパ王国の衰退も関連するが、16世紀末以降になると遺跡数は急激に増加し、この現象は広南阮氏の南遷にともなう再開発とホイアン国際貿易港の成立と深く結びついていることを指摘した。

ホイアン旧市街地の形成は、16世紀末からはじまり、世界遺産に登録された現在の町並みは、碑文史料や文献史料、そして考古学資料から、その成立を西山党の乱後の1780年以降に成立した町並みであることを解明した。

ホイアン日本町とホイアン地域の空間構造では、ホイアン日本町跡の位置について、これまでおもに文献史学者から提出されていた諸説にたいして、発掘調査の成果からえられた事実をもとに批判をくわえた。また、17世紀のホイアン地域の空間構造は、貿易港の位置を河口付近に築くことによって、その前面に軍事基地を配し、河川と交通路の要衝に支配機関である広南鎮営を築き、上流部の山地地帯にある森林生産物の確保と貿易港の監督、ならびに北部と南部に通じる交通路の掌握、南に展開するチャンパ勢力と対峙するための軍事・戦略上の拠点と位置づけていたことを指摘した。広南鎮営跡は発掘調査によって検証し、ホイアン・タインハー土器作りの村は、ホイアン国際貿易港の出現と機を一にするようにして成立した都市依存型の専業の窯業村と位置づけた。

こうした研究を通して、当該地域の歴史を考古学視点から解明すると同時に、17世紀のホイアン地域形成の特質を明らかにし、また17世紀の日本町について考古学視点からあらたな成果をつけくわえることができた。

第2部 ホイアン出土陶磁器の考古学的研究

17世紀のホイアンにおける陶磁組成は、16世紀末から17世紀前半は飲食器として中国磁器の碗・鉢・皿が、17世紀後半になると肥前磁器の碗・鉢・皿が使用され、これに貯蔵具や煮炊き具であるベトナム陶器・土器の組み合わせであることを指摘した。

そして、ホイアン出土ベトナム陶器の生産地を解明し、各窯跡群の生産開始と展開、ならびに歴史上の画期をあとづけた。中部地域が大越領になった15世紀から広南阮氏の南遷(1558年)以前を第Ⅰ期として、この時期の開窯はフエのミースェン窯であり、周辺住民向けの生産と位

置づけた。第Ⅱ期は、広南阮氏の南遷から1672年の北部鄭氏と広南阮氏の抗争が終結した時期である。この時期に北部からの住民の移住やホイアン国際貿易港の成立があり、ホイアンのタインハー窯やクアンチ省フックリー窯が開窯し、ミースェン窯も発展する。とくに、タインハー窯やミースェン窯は貿易港に近く、その貿易港をささえる窯業地の可能性を指摘した。第Ⅲ期は、1672年から広南阮氏の成立した1802年までとし、北部との抗争が終結し、政治的に安定した土地に地域ごとの開窯がおこることを指摘した。クアンビン省ミークオン窯がそれであり、また広南阮氏の南進政策によって新たな南部地域にビンズオン省ライティユウやホーチミン市フンロイなどで開窯がおこることを指摘した。

また、ホイアン出土のベトナム陶器・土器やベトナムの窯跡出土遺物とわが国出土のベトナム陶器・土器の胎土の理化学的分析とその分析結果の考古学的考察をおこなった。その結果、胎土の理化学的分析と考古学上の所見は矛盾するものではなく、相互に補完し、双方の成果を深めるものであることが確認され、考古学と分析化学の協力の必要性を指摘した。

北部ベトナムと中部ベトナムの肥前磁器では、17世紀の北部鄭氏政権下の社会と中部広南阮氏政権下の社会で日本から輸出された肥前磁器がどのように受容されたのかを検討した。その結果、北部では日常食器として受容されたのではなく、中部においては日常食器として受容され、17世紀の北部と中部社会のあり方の相違を指摘した。

このように第2部では、これまで未解明であった17世紀のホイアン地域の食器様相と陶器生産地の解明、陶器生産の歴史的発展過程等を明らかにし、文献史料のすくない中部地域の歴史的解明をおこなった。

ベトナム人による考古学研究の歴史は、すでに半世紀を経過し、先史考古学研究分野において大きな成果をおさめてきた。しかし、歴史考古学分野については、中部地域の16世紀以降を対象とする研究は、これまでほとんど皆無の状況であった。また、一地域の考古学資料を活用して地域史を描くことも、これまでのベトナム考古学界では十分に取りくんできたわけではなかった。地域における研究者の不足や研究機関の未整備がその一因である。

ベトナムの考古学研究の現状のなかで、筆者が取りくんできた方法は、自ら遺跡を踏査し、また発掘調査をしてえられた考古資料をもとに地域の歴史を描き、町並み形成過程を復元し、また地域の食器様相を復元し、陶磁器の生産と流通や交流を明らかにする基礎的な研究として位置づけられるものである。先行研究のほとんどなかった分野のため、中部地域の歴史考古学研究として、また日本・ベトナムの陶磁器交流史の研究として重要な意義を有するものと考えている。

審査報告要旨

本論文「ベトナム・ホイアン地域の考古学的研究—広南阮氏時代(16～18世紀)を中心に—」は、序章、本文第1部6章、第2部6章、終章より構成されている(viii, 242頁, 図72, 表7, ベトナム語要旨)。

まず注目されることは、従来比較的未開拓であったベトナム考古学において、自身による発掘

資料を中心にベトナム中部のホイアン地域の考古学の確立を検討し、加えて各種資料に基づき同地域の歴史的形成とその特質を地域史の展開という視点よりとらえたことである。

序章では研究方法としてホイアン旧市街地、トゥーボン川流域の遺跡分布調査・発掘調査を主とし、遺跡のあり方から地域史の再編を目指す。これには現地の多くの研究機関・博物館などとの協力体制が重視され、実行された。

第1部「ホイアン地域の形成と展開」では、ホイアンの地理的位置と歴史、その研究史が概観され、本地域の歴史考古学的視点の不十分さを指摘（第1章）。ホイアン地域の遺跡分布から、紀元前後頃から中国南部や北部ベトナム地域など北方との交流が認められ、歴史的にも交易拠点としての性格を有していたこと、また15～16世紀以降の遺跡数の減少・増大を広南阮氏の南遷に関連し、ホイアン国際貿易港の成立を指摘した（第2章）。また旧市街地の形成は発掘調査の成果より16世紀末にはじまり、碑文・文献史料、考古資料から現在の町並みの成立を1780年以降とした（第3章）。

ホイアン旧日本町の位置について従来の文献史学による諸説を発掘調査の成果から批判し、旧市街地の形成が16世紀末からはじまる原因を、外国人のための新開地と位置づけた。17世紀広南阮氏政権による貿易港・軍事基地などの支配を論じ（第4章）、文献による当時の行政支配機関である広南鎮営について、発掘調査によりディエンバン・タインチェム遺跡がそれに相当することを指摘した（第5章）。なおツーラン日本町についてはその事実が存在しないことを認めている。ホイアン近郊のタインハー土器作り村の土器製作技術についても歴史的背景から調査し、その出現と都市依存型専門の解明を行った（第6章）。

第2部「ホイアン出土陶磁器の考古学的研究—中部産陶器を中心に—」では、ベトナム北属期から阮朝への陶磁史研究について概観、成果と課題を検討（第1章）、ベトナム中部地域の考古学調査の歴史を1975年以前・以後に分類し、紹介。初期金属時代のサーフィン文化と次のチャンパ文化に比べて、広南阮時代の考古学調査は本研究が最初となる（第2章）。中心テーマである17世紀ホイアン出土の陶磁器の調査・研究では、ベトナム陶器・土器の分類を行い、製作技法、用途を考察。16世紀末から17世紀前半は飲食器として中国製磁器が、17世紀後半では肥前磁器が用いられるようになる。貯蔵具・煮炊き器であるベトナム製がこれに加わることを指摘し、その分類を行った（第3章）。

中部地域の窯跡群調査、発掘調査を基にホイアン出土ベトナム陶器の生産地の解明を大規模に検討・究明し、15世紀から1558年、広南阮氏の南遷以前を第Ⅰ期とし（フエ、ミースエン窯）、第Ⅱ期（～1672年、タインハー窯、フックリー窯）、第Ⅲ期（～1802年、ミークオン窯など）と分類した（第4章）。さらにこれらの中中部窯跡出土生産地資料とホイアン周辺遺跡出土消費地資料及びわが国近世遺跡出土のベトナム陶器について、胎土の理化学的分析を行い興味ある結果が得られている。それは考古学的考察と矛盾するものではなく、相互に補完するものであった。ベトナム・日本間での陶器の流通の科学的証明として意義あるものといえる（第5章）。最後に日本から輸出された肥前磁器のベトナムにおける受容について論じ、北部と中部（日常食器）での社会のあり方の相違、またその輸出時期（1650年2月）についても言及した（第6章）。

ベトナム歴史考古学、とくに16世紀以降の中中部地域の研究は皆無に近い状況にあったといえ

る。本論文は実地踏査、発掘調査により得られた陶磁器資料を中心に、ベトナム中部地域ホイアン周辺の地域史の展開も視野に入れた近世考古学の第一歩を築いたものとして高く評価されよう。なお、本研究は昭和女子大学国際文化研究所を中心とするベトナム・ホイアン地区の諸調査と深くかかわっており、また本人の調査・研究も日本・ベトナムの学術交流に大きく貢献していることを付記したい。

本論文は以上の点より、ベトナム歴史考古学における、ベトナム中部ホイアン地域の近世考古学の先駆的業績として、学術上貢献するところがきわめて大きいと判断される。よって審査員一同は、本論文を博士（学術）の学位論文として十分に価値あるものと認めた。